

上杉景勝書状

【原文】

書中差越、具見届委細心へ候、然者、爰元之儀無何事候、可心安候、一昨十七館落居、敵悉討捕之候、さめかを一城成置候、種々計策成之、堀江かたへ申越候条、落着程有間敷候、可心安候、随而、関堺敵可成働模様之由、いさい心へ候、為栗林始者何も爰元へ越候者共、今日返し候間、何も油断ハ有間敷候、柁之澤之義も早々はきやく可成之由、申越候条、定而如在ハ有間敷候、随而市川甲州へ召よせ、須田五郎赤澤ニ差置候よし申候哉、少も対当城別意ハ有間敷候、爰元へも聞巨細候条、可心安候、扱亦、てつはう事、爰元ニて一人も用所ニ候へ共、其地ニ一向無之よし申越候間、てつはう衆ニ玉葉さしそへさしこし候、其元油断有間布候、爰元何も無別儀入精被相稼候、是又可心安候、其地あしかる共ニ成共申付、番之間ニハさうし・ふしん申付、相稼専一候、清水か小森澤掃候ハ、をしつけ其方爰元へ可召寄候条、其内其元番無油断可申付事、簡要候、委細昨日泉澤・上村かたより可申越候、猶吉事重而、謹言、

三月十九日 景勝（花押）

浅間修理亮殿

【読み下し文】

書中差し越し、つぶさに見届け委細を心得候、しからば、ここもとの儀何事なく候、心安かるべく候、一昨十七館落居す、敵ことごとくこれを討ち捕り候、鮫ヶ尾一城に成し置き候、種々計策これを成し、堀江方へ申し越し候条、落着程あるまじく候、心安かるべく候、したがって、関堺敵働きをなすべく模様よし、委細を心得候、栗林者をはじめとして、いずれもここもとへ越し候者ども、今日返し候あいだ、いずれも油断はあるまじく候、柁之澤の義も早々破却をなすべきのよし申し越し候条、定めて如にあるまじく候、したがって、市川甲州へ召し寄せ、須田五郎赤澤に差し置き候よし申候や、少も当城へ対し別意はあるまじく候、ここもとへも巨細を聞き候条、心安かるべく候、さてまた、鉄炮のこと、ここもとにて一人も用所に候へども、その地に向これなきよし申し越し候あいだ、鉄炮衆、ならびに玉葉差し添え、差し越し候、そこもと油断あるまじく候、ここもといずれも別儀なく精を入れ相稼がれ候、これまた心安かるべく候、その地の足軽どもにも申し付け、番の間には掃除・普請申し付け、相稼ぎ専一に候、清水か小森澤掃り候はば、押し付けその方ここもとへ召し寄すべく候条、その内そこもと番油断なく申し付くべくこと、簡要に候、委細昨日泉澤・上村方より申し越しべく候、なお吉事重ねて、謹言、

三月十九日 景勝（花押）

浅間修理亮殿

【現代語訳（意識）】

届いた手紙は詳しく読んで心得た。こちらは何事もないので、安心するように。一昨日十七日に御館が落城し、敵をみな打ち取った。景虎の逃げ込んだ鮫ヶ尾城は孤立無援の状態だ。城主の堀江宗親へ、さまざまに計策をめぐらしているの、鮫ヶ尾落城も間もなくだろう。これも安心せよ。景虎の実家である小田原の北条氏が国境を越えて攻めてくること。栗林配下の者をはじめ、こちらに来ていた者どもは今日すべて上田へ返したので、油断なく敵に備えるように。樺沢城は早々に破却するようになり申し伝えたので、抜かりのないようにせよ。市川を武田勝頼のもとへ派遣し、須田五郎を赤沢へ配置するということは伝わっているだろうか。彼らが裏切ることはないだろうから、安心してよいぞ。また、鉄炮衆については、一人でも手元に置いておきたいところだが、それらには一人もいないとのことなので、鉄炮衆に火薬を持たせて遣わした。こちらではみんなが必死になって頑張っているの、安心して。足軽どもに申し付けて、たゞ番をするのではなく、そのあいだにも、掃除や普請をさせるようにして、無駄のないように。こちらにいる清水か小森澤が上田へ戻り次第すぐにお主を呼び寄せるので、それまでは抜かりなく番をするように。詳しくは昨日泉澤と上村から連絡がいつているはずだ。また進展があれば、重ねて連絡する。